

シネマスコープ映写機(大新潟映画展覧会にて)

帆樫成林

—はんしゅうせいりん—

新潟市歴史博物館 博物館ニュース vol.66

「帆樫成林」とは？

帆柱が林のように多く立つ様子を表現した語。
人が多く出入りする活気ある「みなと」をイメージしました。

CONTENTS

特集1	水が結ぶ各区の魅力発見 まちあるきモニターツアー	P.2~3
特集2	当館所蔵の資料画像の利用	P.4
歴史さんぽ	石宮公園と弁天通商店街	P.5
おすすめの一冊	萬代橋 ~未来に紡ぐ130年物語~	P.5
研究notes(第40回)	草莽隊士の出自について —「新潟市と戊辰戦争展」補遺	P.6
館長日記	「にいがた2km」と新潟の歴史	P.7
収蔵資料紹介	依田竹谷「米顛拜石・漁樵晩帰図」	P.7

帆樫成林「はんしゅうせいりん」第66号
編集・発行／新潟市歴史博物館 〒951-8013 新潟市中央区柳島町2-10
印刷／株式会社博進堂 発行日 令和8年1月15日

【たいけんのひろばプログラム】

楽しみながら、遊びながら、
昔のことを学びます。

日時	タイトル	内容	申し込み・対象・参加費
1月25日(日) 14:00~15:00	プラ板で家紋のキーホルダーをつくろう	家紋はモノに付けて、家や人を区別する日本の紋章です。好きな武将や自分の家の家紋など、さまざまな家紋の中からお気に入りのものを見つけて、キーホルダーを作りましょう。	どなたでも・申し込み不要・100円 材料がなくなり次第終了
2月22日(日) 13:30~15:30 (おもちゃ作りは14:00~15:00)	あそびのひろばと おもちゃづくり	あそびのひろばがオープン！輪ゴム鉄砲やコマ相撲などなど、おもちゃマスターのボランティアスタッフが作ったおもちゃでスタッフと一緒に楽しく遊びましょう。身の回りにある材料で手軽にできるおもちゃづくりも行います。	どなたでも・申し込み不要・無料 材料がなくなり次第終了

開催中の企画展

「大新潟映画展覧会 娯楽の王様《キネマ》100年物語」

テレビより映画館が身近だったころ、映画は多くの人と共に楽しめる娯楽でした。昭和の人気映画ベストテンや映画館の盛衰、新潟ゆかりの映画人のほか、70年以上前の貴重な新潟ロケ映画などから、映画が新潟の人々を魅了した時代を振り返ります。

会期 2025年12月6日(土)~2026年1月25日(日)
開館時間 午前9時30分~午後5時(観覧券の販売は閉館30分前まで)
観覧料 常設展示観覧券でご覧になれます(一般390円、大学生・高校生260円、中学生・小学生130円) ※小・中学生は土日祝日無料
休館日 毎週月曜日

- 展示解説会**
日時:1月24日(土)
午前11時から30分程度
会場:本館1階企画展示室
参加費:当日の観覧券が必要
申し込み:不要
- 映画上映会「麦秋」(1951年松竹)**
日時:1月24日(土)
午前11時30分から120分程度
(開始10分前より開場)
会場:本館2階ミュージアムシアター
参加費:無料
定員:104名(当日先着)
申し込み:不要

関連イベント

次回以降の企画展

収蔵品展「新潟市街の古写真・絵葉書」 ・新収蔵品展

新潟市歴史博物館では、市民の方々から日々様々な資料をご寄贈いただいています。本年度も市民共有の財産である館蔵資料を市民のみならずにご覧いただく機会として収蔵品展・新収蔵品展を開催します。特に収蔵品展では明治から戦前を中心に新潟市街の古写真、絵葉書を中心に紹介します。

会期 2026年2月14日(土)~3月22日(日)
休館日 毎週月曜日(2月23日(月)は開館)、2月24日(火)

博物館講座

当館学芸員が調査・研究をすすめているテーマについてお話しします。
【時間】 10時30分~12時 **【会場】** 本館2階セミナー室
【申し込み】 要事前申込み(先着80名) **【参加費】** 無料
◆1月の講座:1月25日(日) ※申し込み開始:1月7日(水)
新潟からの鉄道旅行の歴史 講師:高松夏央

みなとびあ便利

10月30日、みなとびあ旧小澤家住宅の指定管理者申請者として、館長以下8名の新潟市芸術文化振興財団職員が評価会議に参加し、プレゼンテーションを行いました。申請した事業計画などの総合的な評価から審査結果が出されます。

みなとびあは開館当初から指定管理制度が導入され、当財団が5年ごとに申請、5度にわたり審査を受け選定されてきました。文化財を含めた収蔵品の保護・活用という重要な役割を持ち、これまでの実績により蓄積された知識やノウハウに基づいて継続的に事業を行う必要があるため、当財団が指名されています。

今回の選定会議では、委員の方から厳しいご指摘もいただきました。選定会議の詳細は市HPに掲載予定なのでぜひご覧になってください。
(学芸課:森)



提出した申請書はズバリと重い

お知らせ

1月26日(月)~2月9日(月)まで
施設整備のため休館となります。

旧小澤家住宅企画展

■「羽子板」展 会期:1月4日(日)~1月18日(日)
■「ひな人形」展 会期:2月14日(土)~3月22日(日)
開館時間:午前9時30分~午後5時 休館日:毎週月曜日・祝日の翌日・年末年始
入館料:一般260円 小学生130円(小学生は土・日・祝日は無料)
所在:新潟市中央区上大川前通12番町2733(みなとびあから約800m、徒歩12分)
TEL:025-222-0300
※1月19日(月)から2月9日(月)まで施設整備のため休館となります

編集後記

今回の特集では当館で今年度に展開したモニターツアーの様子を紹介しました。水が繋ぐ舟運と、その舟運で栄えた在郷町が、広域合併後の新潟市に共通する歴史・文化の一つであるといえます。各在郷町での市民によるガイドは聞き手の心をつかみ、地域の魅力を再発見するきっかけを与えてくれます。また水との関わりについては、湯の存在も見逃せません。自然環境はもちろんです。湿地での暮らしにも目を向けて、新潟市の意外な一面を見てみませんか。(貝沼)

お問合せ・申込みは博物館まで

新潟市歴史博物館 みなとびあ
住所:〒951-8013 新潟市中央区柳島町2-10
Tel:025-225-6111 Fax:025-225-6130
E-mail:museum@nchm.jp URL:https://www.nchm.jp
【休館日】毎週月曜日・祝日の翌日・年末年始(12/28~1/3)
【開館時間】9:30~17:00

2025.6月現在

「みなとびあ歴史発見プロジェクト」は、下記の地域の企業・団体のみなさんからご協賛をいただいています。

(順不同)

平成十七（二〇〇五）年、新潟市は近隣十三市町と広域合併し、十九年には政令指定都市へ移行しました。合併市町を含む新市域には八つの行政区が置かれています。

合併から二十周年となった今年、当館では新潟市から委託を受け、「水が結ぶ」各区域の歴史・文化の魅力発信事業を実施してきました。各区に分かれた旧市町の魅力を、歴史・文化の側面からあらためて見つめ直し発信しようというもので、本事業を構成する企画の一つが「水が結ぶ各区の魅力発見まちあるきモニターツアー」です。

現在各区には、それぞれ地域について学習し、その見どころや特色を発信しているボランティアのまちあるきガイド団体が組織されています。今回のモニターツアーは、そうしたガイド団体と博物館が連携し、今後、文化観光として発展する可能性を見出す試みの一つでもありました。

ツアーのまちあるきを選んだコースは、旧市町の中核を担った地域で、ほとんどは江戸時代に成立し川湊として発展した旧在郷町です。現新潟市域を含む新潟平野には信濃川・阿賀野川の大河に加え、大小の河川が網の目のように張り巡らされていることから、古くから河川交通が盛んでした。江戸時代、そうした河川の要地に在郷町が開かれ市が立ち、特産品もつくられ地域の拠点として発展していきます。そうした在郷町が近代に入っ

市町村の母体になっていきました。

まちあるきは全五回、各河川の要地にある旧在郷町計一〇か所を巡りました。町の中軸となる通りのほか、河川の船着き場跡地なども訪ねました。さらに、令和四（二〇二二）年、新潟市が国内初となるラムサール条約湿地都市に認証されたことから、最寄りの湯の見学も加えました。

なお、各回の開催とその状況は①から⑤の通りです。参加者は各回二〇人の定員で募集し、その多くは新潟市民でした。参加者にはワークシートの提出を求め、まちあるきを通じて感じた町の個性や魅力となる歴史・文化資源、地域で活動するガイドボランティアについての思い、湯に関する考えなどを聞かせてもらいました。

① 粟ノ木川「亀田・新井郷川」葛塚のまちあるきと「福島湯」見学

〔実施日〕十月十一日（土）
〔ガイド〕タウンウォークかめだ 北宝隊

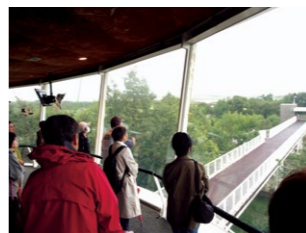


亀田（江南区）
諏訪神社拝殿の天井絵

亀田は粟ノ木川の川湊として発展した郷町。

② 信濃川「小須戸・能代川」新津のまちあるきと「北上池」見学

〔実施日〕十月十五日（水）
〔ガイド〕小須戸コミュニティ協議会 秋葉区観光ボランティアガイドの会



福島湯（北区）
ビュー福島湯から福島湯を望む

新潟市内最大の湯で、冬季にヒシクイが飛来することで有名。



葛塚（北区）
蒸気船発着場跡

葛塚は新井郷川の川湊として発展した郷町。



北上池（秋葉区）

能代川の氾濫による破堤によって地面が削られ形成された水面（落堀）。



新津（秋葉区）
旧能代川（現新津川）の河川公園

新津は能代川の川湊及び街道の宿場として発展した郷町。



曾根（西蒲区）
西川の船着き場跡

曾根は西川の川湊として発展した郷町。



巻（西蒲区）
千仏寺内の見学

巻は西川の川湊として発展した郷町。



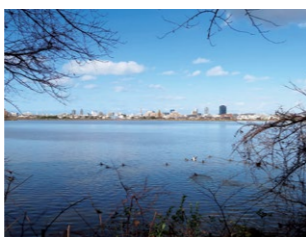
佐潟（西区）

水鳥の宝庫として世界にも認められ、平成8（1996）年にラムサール条約湿地に認定された。



酒屋（江南区）
会津藩の陣屋跡碑付近

酒屋は小阿賀野川の川湊として発展した郷町で、幕末には会津藩の陣屋が置かれた。



烏屋野湯（中央区）

市街地にあり、周辺には公園や公共施設が整備されている。水位が標高-2.5mに保たれ、洪水時には水の貯留施設ともなる。



大野（西区）
中ノ口川の堤防上

大野は中ノ口川の川湊として発展した郷町。



金巻の池（西区）

中ノ口川の氾濫による破堤によって地面が削られ形成された水面（落堀）。

④ 阿賀野川「沢海・小阿賀野川」酒屋のまちあるきと「烏屋野湯」見学

〔実施日〕十一月一日（土）
〔ガイド〕みるみる沢海まちあるきガイド タウンウォークかめだ



沢海（江南区）

北方文化博物館前
沢海は阿賀野川と小阿賀野川の分流付近に位置する村で、江戸時代の一時期には沢海藩の陣屋が置かれた。千町歩地主伊藤家の屋敷があることでも有名。

⑤ 中ノ口川「白根・大野」のまちあるきと「金巻の池」見学

〔実施日〕十一月八日（土）
〔ガイド〕しろね大風タウンガイド 大野町まち歩き会



白根（南区）
本町通の町並み

白根は中ノ口川の川湊として発展した郷町。

参加者のワークシートには各地域の魅力的な歴史資源が具体的に示されたほか、まちあるきガイドの有効性についての意見が多く述べられていました。普段何気なく見過ごしている町でも案内されることによって日常とは違う風景に映り、人々が永く暮らしてきた町の重みや価値、おもしろさが感じられたようです。そして何も無いと思っていた町にも資源が豊富にあったことにあらためて気付いたようです。こうしたガイドの活動がより広く知られ活発になれば、地域の歴史に関心を持つ人、地域に愛着を持つ人も増え、地域が元気になる一つのきっかけになるのではないかと思います。また、文化観光へ発展させるためには、旅行事業者の理解と協力が必要であることも感じました。

一方、湯についての記述からは、湯を訪ねる機会がこれまであまりなかったという意見が意外に多くありました。市内には一六の湯が存在し、新潟市の都市環境を特色づけていますが、市民との関わりは希薄のようです。今回はまちあるきが主で湯の見学は副の位置づけでしたが、湯の見学を高く評価する意見が多く見受けられました。湯には人を魅了するポテンシャルがあっても、存在が十分に認知されていないということなのでしょう。

今回のまちあるきは、冒頭で示した「水が結ぶ」各区域の歴史・文化の魅力発信事業の一企画です。このほか本事業では当館のミュージアムシアターで上映する映像「水がむすぶ新潟（仮称）」を今年度から来年度にかけて制作します。この映像も川湊でもあった市内の旧在郷町に焦点を当てたもので、河川で結ばれた新潟湯も加え、現在の町の姿から過去へといざない、今の新潟市域全体に通じる歴史像を描いていきます。完成までしばらく時間がありますので、以後、途中経過など紹介していきたいと思っています。お楽しみに！

（こ）ばやし たかゆき 副館長



只今、映像撮影中
（白根中ノ口川船着き場跡地）

当館所蔵の資料画像は書籍や映像等、様々な媒体へ掲載利用することができます。この際、利用をご希望する方には、お手数ではありますが「画像利用許可申請書」を提出いただいています。そして館内で申請内容を確認した上で「利用許可書」を送付しています。これにはどのような資料画像に利用ニーズがあるのか、館として把握する意味もあります。

最近の利用状況を概観すると、当館発行の企画展図録をはじめとした書籍に掲載されてきた資料画像のご利用が多いようです。

また、事前に利用者から希望する資料のイメージをお伝え頂き、それに合致する館蔵資料を探してご提供する場合もあります。テレビ番組のご使用等が代表例です。特に本年度は戦後八〇年を迎えたこともあり「終戦の日」前後には、「こうした」ご要望を多く頂きました。しかし当然のことではあります。歴史資料は何もかも都合良く残っているわけではありません。このためご希望のイメージに沿うような資料が存在しない場合も多々あります。

そうしたなか、近年最も利用頻度が高かった資料を調べたところ、井上文昌が描いた安政六（一八五九）年「新潟湊之真景」でした。安政五（一八五八）年に江戸幕府が諸外国と条約を結び、新潟も開港地に選ばれました。これを受け、翌年に調査を目的とした外国船が新潟に

来港しました。本作品はこの様子を描写した錦絵です。

ちなみに近年、新たに本作品の外袋が見つかりました。そこには「新潟湊異国船渡来之図」という、これまで知られてこなかった、描かれたテーマにまさしく合致する表題が記されていました。

もともと本作品は、外国船のみならず、数多の和船や港の諸施設を俯瞰し、遠景の佐渡の存在によって画面に奥行きを持たせながら、青を基調した濃淡で信濃川河口を描いている点が特徴であり魅力でしょう。開港という一事に留まらない「みなとまち新潟」をイメージさせる作品として多くの場面で利用されてきました。

二番目に利用が多い資料は、嘉永五（一八五二年）「蟹の手振り」です。初代新潟奉行川村修就の遺品であり、新潟町及び周辺の水辺における風俗六景を画と文章で示した絵巻物です。六景の中では特に「湊祭」と「盆踊」が多く利用されています。「新潟まつり」や「にいがた総おどり」と関係する点も利用に拍車をかけているようです。

三番目の資料は文政六（一八二三年）八月写の「新潟町絵図」です。新潟町全体を描いた絵図であり、弓なりの町姿、通り・小路の名称、さらに代表的な町の施設を明瞭に示しています。

なお右記の資料をはじめ、特に利用頻度が高いものについては当館のホームページで画像を公開しています。館ホームページ

ホームページのトップページから「楽しむ・学ぶ」「おうちみなとぴあ」「収蔵資料紹介」を辿ってアクセスすることができます。

（あとか しゅんすけ 学芸員）

当館ホームページ
「収蔵資料紹介」



安政6(1859)年「新潟湊之真景」



嘉永5(1852)年「蟹の手振り」のうち「湊祭」(上)「盆踊」(下)



文政6(1823)年8月写「新潟町絵図」

歴史さんぽ

石宮公園と弁天通商店街

2025年11月現在、新潟駅周辺のリニューアル工事が大詰めを迎え、新潟の新たな玄関口の全容が明らかになってきました。隣接する石宮公園もリニューアル工事が完了し、先日、記念式典が開催されました。

さて、この「石宮」の名は何に由来するのでしょうか。

現在の新潟駅付近は江戸時代、信濃川の河口近くに形成された川中島に端を発し、附寄島と呼ばれたところで、新田開発されたのちには流作場新田となりました。

明治25年頃には、流作場新田一帯に30の小字がつけられていたようで、そのうちの 하나가、現新潟駅付近の「石宮」です。

石宮という字名の由来は、流作場新田の集落地であった居村（現在の三和町）の人々がツツガムシ除けのためにこの地に石の祠を建てて弁財天を祀ったことによる、とされています。そのため、石宮に隣接するエリアの小字は弁天でした。

「昭和30年頃の石宮様の祭礼」と題した写真が『流作場二百五十年誌』に掲載されており、その頃この地に祠があり、人々に信仰されていたことがわかります。

昭和29(1954)年、新潟駅が現在地に移転するため、新潟駅前土地区画整理事業がスタートします。現在の駅前の様子からは想像もできませんが、その頃は一帯が農地で、田畑が広がっていました。

新駅から流作場三叉路（現流作場五差路）に至る42.4ヘクタールが事業対象となり、田畑は信濃川・新潟港の

浚渫土を使って埋め立てられました。

駅前通りである50m道路の東大通、そして新発田街道と新潟駅前をつなぐために東大通から沼垂方面に直行する明石通が新設されました。このとき、あわせて設置された4つの公園のうちの一つが石宮公園です。

駅前の商店街は弁天通商店街と名付けられ、昭和35(1960)年の町名整理で石宮公園を含む周辺は弁天町になりました（昭和52(1977)年の住居表示施行により、弁天となる）。平成21(2009)年には弁天通商店街50周年を記念して、七福神の像が商店街の通りに設置されました。

石の祠は、石宮公園の整備と前後して三社神社に移され、昭和53(1978)年には、三社神社の境内社として石宮神社が建立されました。

駅周辺に残る「石宮」の痕跡は石宮公園のみとなってしまいましたが、石宮様である弁財天に由来する地名と商店街名、そして、弁財天を含む七福神の銅像が商店街に賑わいを添える風景が新たな形で流作場の歴史を伝えています。

藍野 かおり(あいの かおり 学芸員)



リニューアル工事が完了した石宮公園

おすすめの1冊

萬代橋

〜未来に紡ぐ

130年物語〜

萬代橋は明治十九（一八八六）年、当時の新潟と沼垂をつなぐ橋として架橋されました。これまで二度にわたって架け替え工事が行われ、現在の橋は三代目になります。

本書からは、萬代橋が架橋される経緯や、通行料を徴収していた架橋初期の苦悩、新潟駅開業により橋の交通量が向上したこと、新潟地震など災害から復興し、町が発展して現在に至る歴史を知ることができます。

他にも、新潟市にゆかりのある著名人から寄せられた萬代橋にまつわるエピソードの紹介もあり、一つのインフラとしてだけでなく、地元新潟市のシンボルとして愛されていることが伝わります。

新潟が発展していく上では欠かせない存在となった萬代橋。架橋から今年で一四〇年を迎え、萬代（よろづよ）に渡って市民に愛される理由がわかる、そんな一冊です。

（高松 夏央 学芸員）



新潟日報社 編／著
2017年
新潟日報事業社 発行

草莽隊士の出自について——新潟市と戊辰戦争展」補遺

田嶋 悠佑

令和七(二〇二五)年に開催した「戦場の町と村 新潟市と戊辰戦争」展は、予想以上に多くの方に観覧をいただき、戊辰戦争に対する関心の高さが感じられました。また、特に農民や町民が中心になって新政府に協力するため隊を結成した、北辰隊や居之隊など草莽隊士の子孫の方々にも観覧していただきました。戊辰戦争が身近な歴史として新潟に残っていることが実感できました。

ドトップの者の名はみえないものの、白山公園に歌碑が残る居之隊の鏡測意伯のほか、北辰隊士や金革隊士の履歴がみえます。

例えば、北辰隊士は隊長の遠藤七郎が庄屋を務めた下興野新田(葛塚町)居住者が一七名と最も多く、土地亀新田や内沼新田など葛塚周辺にも居住者がみられます。金革隊士は中蒲原郡や西蒲原郡の居住者がみられます。特徴的なのは庄瀬出身の北辰隊士が八名とあって存在することで、地元の人材に声をかけられたり、勤王思想に共鳴したりして参加したことが書かれていて、草莽隊への参加のきっかけを考える上で興味深いものです。戊辰戦争当時、十代から三十代だった者が多いことなどの傾向もみてとれます。

(1) 明治十一年(一八七八)年「勤王家履歴」からみた草莽隊士の出自

明治十一年八月から始まった明治天皇北陸巡幸の際、新潟町や新発田町、長岡町などで勤王功労者として元草莽隊士が明治天皇の拝顔を許されました。これに際して、新潟県は拝顔する者たちの功績を書面で提出させ調査を行ったよう、県に集められた書面は「勤王家履歴」(以下、「履歴」)として新潟県立文書館に残っています。

「履歴」は元隊士の明治十一年時点の年齢や職業、志士となった経緯などが記されています。金革隊長小林政司などトップの者の名はみえないものの、白山公園に歌碑が残る居之隊の鏡測意伯のほか、北辰隊士や金革隊士の履歴がみえます。

例えば、北辰隊士は隊長の遠藤七郎が庄屋を務めた下興野新田(葛塚町)居住者が一七名と最も多く、土地亀新田や内沼新田など葛塚周辺にも居住者がみられます。金革隊士は中蒲原郡や西蒲原郡の居住者がみられます。特徴的なのは庄瀬出身の北辰隊士が八名とあって存在することで、地元の人材に声をかけられたり、勤王思想に共鳴したりして参加したことが書かれていて、草莽隊への参加のきっかけを考える上で興味深いものです。戊辰戦争当時、十代から三十代だった者が多いことなどの傾向もみてとれます。

(2) 北辰隊士三村棟一郎関係文書について

新潟県護国神社の境内には北辰隊士、金革隊士らの墓碑が残っています。墓碑があるうちの一人、北辰隊士三村棟一郎は新政府軍が赤谷(新発田市)方面から会津藩領を攻める途上、慶応四年八月十四日に角石原の戦いで戦死しました。

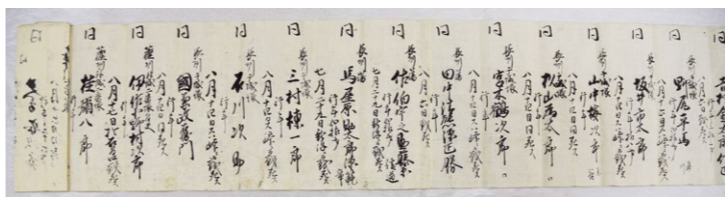
今回の企画展をきっかけに棟一郎の子孫の方と連絡が取れ、棟一郎関係の史料が残っていることがわかりました。

史料は江戸時代から大正時代にかけての一点でしたが、戊辰戦争関係のものには三点のみですが、戦没者墓所の塔婆の写や明治三(一八七〇)年の兵部省からの祭料一三〇両を下賜する通知、明治二十四(一八九二)年に三村家が当時住んでいた新津町の町長から三村棟一郎を靖国神社に合祀することが決まったと伝えた書簡です。

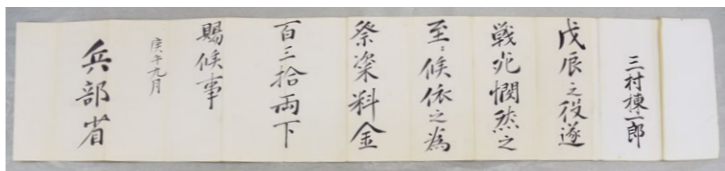
そのほか、三村家は元武士だったと言いつづけており、江戸時代に実名や花押を決めるため、姓名判断をした際の記録などがみられます。

三村棟一郎の詳細は諸書で触れられておらず、貴重な史料であることが確認できました。

ご厚意により、三村家の文書は当館に



戊辰戦争戦没者の書上



三村棟一郎の祭料下賜を伝える書簡

「にいがた2km」と新潟の歴史

みなとぴあで「にいがた2km」からたどる新潟四五〇年」と題する講演を行いました。にいがた2kmは、市のホームページによれば、新潟駅、万代、古町をつなぐ約二キロの都心軸です。市の成長エンジンとして都市政策・まちづくりの核に位置づけられています。この「2km」は歴史とは無縁のように感じますが、じつは四五〇年に及ぶ新潟の歴史を凝縮しています。

都市として新潟の原点は、信濃川河口に開けた港町にあります。江戸時代の明暦元(一六五五)年、信濃川の中州であった現在の古町地区に、西大畑・寄居にあった「古新潟」が移転し、新たな町が造成されました。古町・本町の通りと二本の堀が縦貫する南北二キロもある港町は、全国的にも大規模で、今もその町割



新潟市HPより



新潟市歴史博物館 館長 坂井秀弥



新潟市HPより

戦後昭和三十三年(一九五八)年、新潟駅が現在地に移転しました。萬代橋から流作場五差路まで延びていた道路は駅まで達し「2km」となります。

新潟の都市軸は、主たる交通が船から鉄道に変わるのに伴って、江戸時代の南北方向から近代に東西方向へと転換します。単なる二キロの道ではなく、歴史を超えて新潟が発展してきた道程であることがわかります。背景にある歴史を理解すると、市の看板政策を応援したくなります。

収蔵資料紹介

依田竹谷「米顛拜石・漁樵晩帰図」

本作品に描かれているのは、中国北宋時代の書家・画家である米芾と、夕暮れに家へ帰る漁師と樵です。米芾は奇岩の愛好家としても知られ、名石を見つけると恭しく拜んだという逸話があります。漁師と樵は、自然に従って生きる存在にとらえられていました。いずれも俗世を離れ自分の心のままに生きる理想の姿が描かれています。

作者の依田竹谷(一七九〇—一八四四)は、松平定信に仕え関東文人画の大家であった谷文晁に画を学びました。江戸の儒学者亀田鵬斎とも親しく、共に越後へ遊び、文晁と偽って画料を稼いだという裏話的なエピソードが残っています。

旧蔵者の佐藤家は熊鷹新田(旧西川町)の庄屋および水沢新田(旧潟東村)の組頭を務めた家で、幕末期の当主佐藤忠太郎は江戸への遊学経験があるとのこと。

佐藤家からはもう一件、新潟出身の画家五十嵐竹沙(一七七四



(一八四四)の作品も共にご寄贈いただきました。竹沙は、江戸中期の新潟を代表する絵師五十嵐俊明の孫で、新潟から江戸に出て活躍した人物です。彼も亀田鵬斎と親交が深く、鵬斎の越後の旅に途中まで同行したことがわかっています。

竹谷の越後行きはあくまで伝承ですが、これらの寄贈品から竹谷と亀田鵬斎、五十嵐竹沙との交流や、そろつての越後旅など、愉快な想像をかきたてられます。二月十四日よりはじまる新収蔵品展で展示予定です。

(中村 里那 学芸員)